

2021/4/19-2

(うと Q 世話し もう止めましょうよ、それ) 前記事書き直し版

「物言えば唇寒し秋の風」

という訳で、余計なことは言わないでおこう。

となり、余計な事どころか、必要なことまで言わなくなり、果ては

「見ざる、言わざる、聞かざる」

を決め込み、そのくせ反対に

「何も見ないし、言わないし、聞かないことにしている」けれど、そこはそれ、要するに何もこちらからは発信しないけれど「以心伝心」で、あなた方は私の胸の内をちゃんとわかっていて、然るべき、よね (だろ)」

になっていませんか？

はたまた、

「出る釘は打たれる」

という訳で、

「正しいか正しくないか、ではなく、みんなと同じかどうか？」

が最優先されていませんか？

何よりも怖いのが、目立って後ろ指をさされ、仲間外れになる事。

それで、横一線の横並び。ちょっとした差異で、袋叩きの超強力同調圧力をかけていませんか？
もしくはかけられておりませんか？

そうして本日最後は

「赤ちゃんは、王様」

という訳で、

生まれた時が最高得点。

後は年を追うごとにどんどん失点、劣化していく、という考え方。

どこにも経験の年輪とか、年を経て熟す、という価値観がまるで失われてしまっている。

その結果、若い人は

「大人になりたくない」

になり、年配者は

「若ぶる」か「若い人のご機嫌伺をし、人気取りに励む」

ようになってしまった。

そうしてお互い、

「鵜の目鷹の目」

で、あたりの様子を探り、恐る恐る

「息を殺して」気配を悟られぬよう「抜き足差し足忍び足」で暮らす

「相互監視岩盤社会」

になってしまっているのが、コロナ禍以前から既にあった今の我が国の実態。

敵は城外に在らず。城内に密偵冠者として、在り。

何よりも怖いのは、今般のコロナより、歴代以前から厳然として在る「我が同朋の目線」こそ。

これではいくら何でも、疲れますでしょう（ずっと疲れていたでしょう）

でも、もう止めませんか、それ。

「どうせ、人生一回限り。それをこんなことに使っていたら、実に勿体ない」

コロナ禍を機に、もう止めましょうよ、それ。